

令和 7 年漁期 イカナゴ新仔（シンコ）情報

令和 7 年 2 月 20 日
香川県水産試験場

1 気象・海象

(1) 水温（図 1）

・屋島湾（備讃瀬戸）の水温は、平年値（1991-2020 年の平均値）と比較して、11 月上旬から 12 月中旬までは著しく高めから平年並み、12 月下旬から 2 月中旬までは平年並みからかなり低めに推移している。

・2 月 13 日高松地方気象台発表の 1 か月予報では、四国の気温は低いと予報されており、従って、**今後も水温は低めに推移するものと考えられる。**

(<https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/longfcst/kaisetsu/?region=010800&term=P1M>)

・成熟開始のきっかけになると推測されている「水温 20℃」を下回ったのは、11 月 21 日で、平年（11 月 9 日頃）より 12 日遅かった。

・夏眠終了が本格化すると推測されている「水温 13℃」を下回ったのは、12 月 22 日で、平年（12 月 19 日頃）より 3 日遅かった。

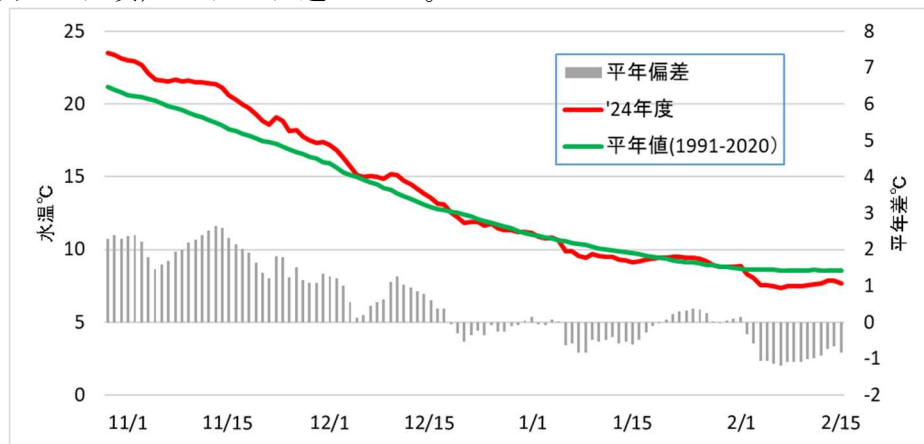


図 1 水温の推移（屋島湾水深 1.5m，午前 9 時）

(2) 季節風（図 2）

・季節風（特に西風成分）の強弱は、備讃瀬戸から播磨灘に運ばれるイカナゴ仔稚魚の量を左右し、風が強いと分散が良く生残も良くなる傾向がある。

・12 月以降の旬別平均風速（西風成分※）は、12 月は「平年並み」から「やや高め」、1 月は、「平年並み」2 月上旬は「かなり高目」と推移している。

・なお、過去の耳石調査の結果より、ふ化は通常 1 月中旬頃に行われる。

※時間毎の風向データを西成分を 1 とする西－東成分に変換し、それに風速を乗じた値を平均して求めた（東成分は除く）。平年値は 2000-2023 年度の平均値。

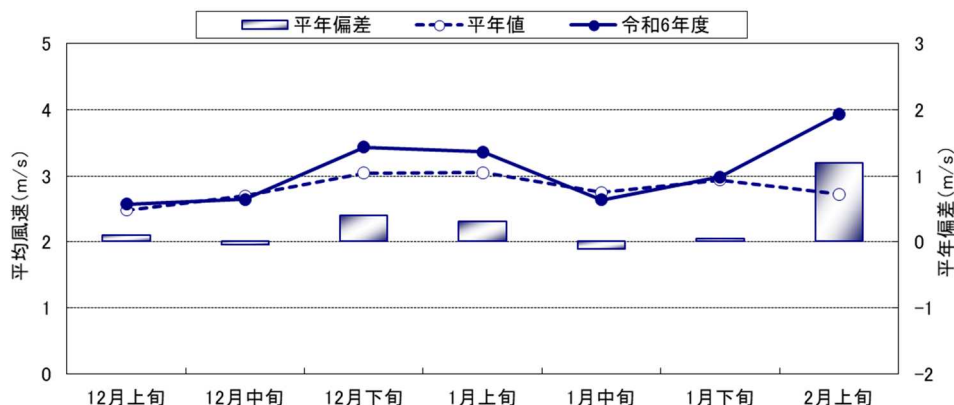


図 2 平均風速（西風成分）の推移（高松地方気象台）

2 親魚調査

(1) 親魚密度 (図 3, 表 1)

・12月9日の1回、高松～庵治地先において空釣りこぎによる親魚調査を実施した。(なお、例年12月下旬から1月上旬にかけて、2回目の調査を実施していたが、本年度は天候等の関係で中止となった。)

・速力3～5ノットで1地点5分びきを原則3回ずつ5地点(図3)において実施した。

・親魚密度(空釣りこぎ1回当たりの採集尾数)は、1歳魚においては0.20尾(前年0.33尾, 過去10年の平均3.86尾), 2歳魚以上は採捕されず(同0.03尾, 0.74尾)であり、**1歳魚, 2歳魚以上ともに過去最少であった。**

・1歳魚の平均全長は101.2 mm(前年86.6 mm, 過去10年の平均88.9mm)であった。

*1歳魚: 令和6年1月1日生まれを示す。以下同様。

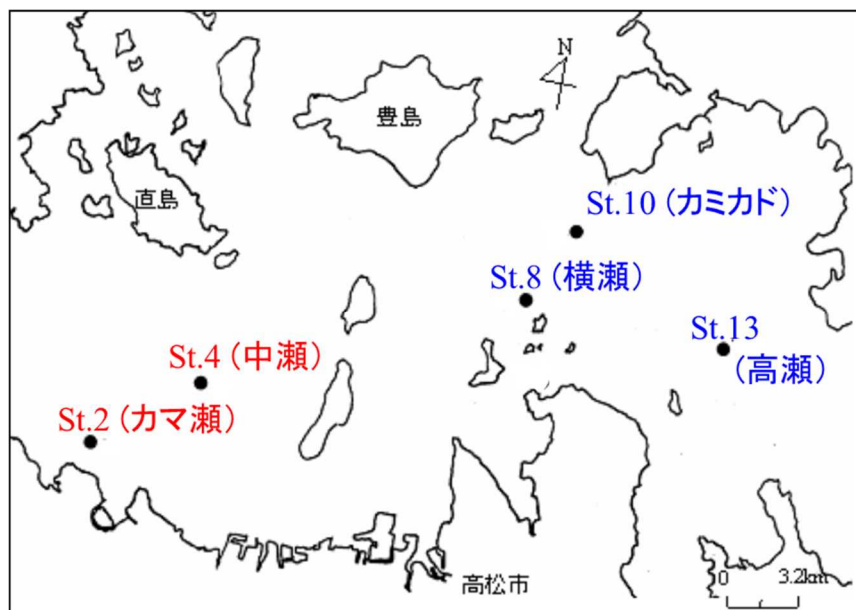


図3 調査定点

表1 親魚密度(空釣りこぎ1回あたりの採集尾数)

		1歳魚			2歳魚以上			全体
		親魚密度 (尾/回)	割合 (%)	全長 (mm)	親魚密度 (尾/回)	割合 (%)	全長 (mm)	親魚密度 (尾/回)
今年度	夏季	0.4	100.0	84.9	0.0	0.0	-	0.4
	冬季	0.2	100.0	101.2	0.0	0.0	-	0.2
H26-R5	夏季	3.8	96.1	85.9	0.1	3.9	136.1	3.9
平均	冬季	3.9	84.2	88.9	0.7	15.8	134.3	4.6

(2) 生殖腺の成熟状況

・生殖腺熟度指数($GSI(\%) = \text{生殖腺重量} \div \text{体重} \times 100$)は、メス 3.3 (n=2)、オス 11.5(n=1)であった。

・サンプル数が少ないものの、未成熟の個体は見られず、水温低下と共に順調に産卵が行われたと推測される。

(3) 産卵量

親魚密度および2月14日から実施されている込網におけるイカナゴ親魚の漁獲状況(「2月上旬までのイカナゴ(親魚)の漁獲状況」を参照)から、**親魚量は過去最少レベルにあり、産卵量も親魚量に準ずると予想された。**

3 仔稚魚調査

(1) 仔稚魚の出現状況 (図 5)

備讃瀬戸 3 定点および播磨灘 3 定点の計 6 定点で 1 月 21 日の 1 回、ボンゴネット (口径 60 cm) の往復傾斜びきを実施した。**過去 8 年間の平均と比較すると 2 番目に低い値となった。**(なお、例年 2 月前半に 2 回目の調査を実施していたが、本年度は天候等の関係で中止となった。)

① 1 月後半調査 (1 定点あたりの平均仔稚魚数)

・備讃瀬戸が 0 尾 (前年 0 尾, 過去 8 年平均 22.0 尾) で、播磨灘が 0.6 尾 (同 0 尾、3.6 尾) であった。

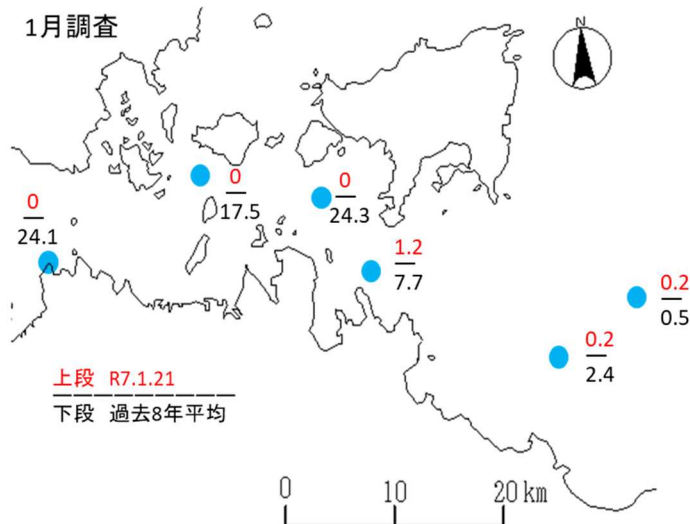


図 5 イカナゴ仔稚魚の採集数 (ボンゴネット面積 1 平方 m の水柱あたりの尾数)

4 2 月上旬までのイカナゴ (親魚) の漁獲状況 (いかなご込網漁業)

庵治 2 月 14 日から操業を開始したが、親魚の漁獲は見られてない。

5 まとめ

- ・親魚調査および親魚の漁獲状況から、親魚量および産卵量は過去最少レベルと推測される。
- ・仔稚魚調査から、仔稚魚の発生状況は過去最少レベルと推測される。

全国的、長期的に見ると、近年、イカナゴの減少傾向が続いている。イカナゴを取り巻く環境は、高水温や貧栄養など厳しい状況にあるが、今出来ることは来漁期に向けて親魚をより多く残すことである。資源量の少ない状況での漁獲は、資源の減少に追い打ちをかけると考えられるため、操業に際しては、終漁を早めるなど格段の配慮が必要である。

【参考資料】

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所 水産資源研究センターは、備讃瀬戸の広い範囲で親魚調査及び仔稚魚調査を実施している。

詳細については、ホームページに掲載されている次の情報も参照されたい。

https://www.fra.go.jp/shigen/fisheries_resources/result/ikanago.html

※調査 2～4 については水産庁委託事業「水産資源調査・評価推進委託事業」の一環で実施。